「葦」第47号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院
看護部長　　高橋　美雪

当看護部には随時、院内外から調査・研究協力の依頼が寄せられてきます。その数は年間100件を超えますが、その中でも多いのが学外大学院の修士課程（博士前期課程）の研究協力依頼です。平成28年度は退院支援・調整に関するもの、がん患者支援に関するもの、専門・認定看護師の活動に関するもの、そして看護教育に関するものなどが多くを占めていました。その時々の社会情勢や医療・看護の現状や変化がこうした依頼の研究テーマ、調査内容に見て取れます。時代のニーズ、社会のニーズの変化に対応するための探究心につながっているのでしょう。

ただ、残念ながら毎年と言ってよいほど目に留まる研究が、新人看護師の実践能力の実態、看護職のキャリアに関する意識調査といったものです。依頼元は異なるもののほぼ類似した調査内容で、対象も時期もほとんど変わらないといった具合です。明らかに研究のプロセスを学ぶための看護研究なのだろうと推察できます。倫理的配慮、文献検索の方法、研究の意義、問いの立て方など、研究のプロセス「型を学ぶ」ということを学習しているのだと思います。皆さんの中にも（特に新人であった頃の皆さんは）調査に協力した人がいると思います。何か医療や看護の未来に貢献できることがあるなら…と。ただ、そのときに、こういう問いの仕方は答えにくいとか、この問いはどのように整理・分析するのだろうといったように協力しつつも学ぶ機会でもあることを意識してみると面白いと思います。

さて、平成28年度の院内看護研究で目に留まったのが「困難感」というワードです。これは流行りなのかと思いましたが、すでに5年以上前には使用されていました。がん看護の領域で発生したものかもしれませんが、医療が複雑・高度化、多様化した現代に皆さんが抱えているジレンマを物語っているワードのようにも思えます。

また、院外発表を終えた看護主任に一部を紹介してもらいました。これは平成27年から看護研究の指導者の育成として、看護主任が看護教員の支援を受けながら看護研究を行い、学外での発表を目標に取り組んできた成果です。こうした学び、研究のプロセスを後輩指導に役立ててもらえると期待しています。

平成27年度から看護部の目標のひとつに「現行の看護を検証し、合理性（理にかなっている）のある看護実践に繋げる」を掲げ、看護研究を実践に繋げることを注視するように図ってきました。それは過去数十年に渡って看護部が行ってきた看護研究が実践（臨床の看護）に活かされて継続されていると実感できるものが少ないからです。率直に言うならば、研究発表のための研究で、発表が終われば、今皆さんが目を留めているこの「葦」という冊子に掲載されて、しばらくは書棚に立て掛けてあるものの、そのうち廃棄されて跡形もないといった顛末になりかねないということです。専門職として自ら看護の質の向上を目指して研究、研鑽したことが看護部の看護業務・手順、そして実践に反映され継がれることを期待します。